

ああ大統領選

今年の大統領選挙と宗教

2012年にも既に6月後半。これから5ヶ月近く、アメリカは大統領選挙という四年に一度の大騒ぎに巻き込まれて行きます。今年は先行きが見えない経済状況の中、どちらの候補がより具体的で即効性のある政策を提示し、人々の期待を引き上げられるかが選挙の争点になるでしょう。その意味で今回の選挙における「宗教・文化的立場」は二の次になっていくかのように思われますが、それでも選挙における宗教の果たす役割は決して小さくありません。

今では候補落ちしたリック・ペリー氏を応援していた牧師は次のように語りました。「ミット・ロムニー氏はモルモンなのでクリスチャンではない。しかし口では自分がクリスチャンであると告白しておきながら聖書の価値観に立たないバラック・オバマ氏よりはよい。」※1 現に五月中旬、オバマ氏は「同性婚を支持する」ことを表明し、大きな波紋が起きています。特に前回選挙でオバマ氏の信仰の有り様に対して目をつぶってオバマ氏支持に回ったアフリカ系アメリカ人牧師や地域リーダーたちから発言撤回の強い要望が出されています。その中にはキング牧師とともに公民権運動に直接携わった牧師やキリスト者たちもおり、アフリカ系アメリカ人クリスチャンたちの間に大きな痛みが生じています。※2

一方、異端視されているとは言え、救済論（人は如何に神からの救いを受けるか）以外は、保守的なクリスチャンとほぼ同じ価値体系を共有しているロムニー氏に対しては、モルモン教徒ということで二の足を踏んでいた保守的クリスチャンたちの間でも支持が増えて来ている状況です。選挙戦では特に人口妊娠中絶、同性愛者の権利、進化論教育等に対する立場がリトマス試験紙の役割を果たしますが、モルモン教徒はこれらのテストには楽々合格してしまうのです。

そのような中、福音的キリスト教（Evangelical Christian）の立場に立つこの者から見えて来るものも少し、分かち合えたらと思います。

ロムニー候補の宗教

前述のように、ミット・ロムニー候補の宗教はモルモン教です。※3 日本では「短く刈られた金髪の青年たちがスーツに身を包み、自転車を移動手段としながら、「あなたは神を信じますか」と辻説法する二人組の外人」というイメージ、あるいは一夫多妻で知られている宗教です。よく似ている宗教でエホバの証人／ものみの塔という団体がありますが、こちらも二人組で日本全国津々浦々、雨の日も風の日も一軒一軒訪ね回ることでは知られています。両方とも、歴史的・聖書のキリスト教を標榜するクリスチャンたちからしてみると「キリスト教異端」なのですが、二つのグループの大きな違いは、エホバの証人／ものみの塔の人々が絶対に投票を行わず、政治に参加しないのに対して、モルモン教徒は積極的に社会参加することです。ゆえにロムニー大統領候補・・・なのです。ユタ州の現職上院議員（共和党／全米最年長）のオーリン・ハッチ議員、ネバダ州の現職上院議員（民主党）ハリー・リード議員、ラジオ・インターネットでカルト的な人気を博している政治トークショー・ホストのグレン・ベック氏なども自分たちがモルモン教徒であることを全面に出している人々であり、社会的には大きなインパクトを与えています。

なぜ彼らが異端扱いされるのかの最も簡単な説明は、その教義が、初代のキリスト教会から信じられて来た神の「三位一体性」と、プロテスタント宗教改革の柱である「聖書のみ」「信仰のみ」の枠から外れるからなのです。モルモン教・・・正式には「末日聖徒イエス・キリスト教会 Latter Day Saints」には聖書の他に、モルモン書（The Book of Mormon）

が教典としてあり、さらに救済の条件として「信仰のみ」ではなく善行の必要が説かれ、密教に近い祭司制度があります。更にイエス・キリストが誰であるか、ということについても大きな違いがあるので。ただ、以前はキリスト教カルトという扱いを受け、毛嫌いされていた状況から、有名人たちが排出されたり、積極的な社会進出のおかげでモルモン教は今では堂々一つの宗教という地位を獲得しているように思います。今回の選挙では誰が「経済を建て直せるか」ということで、ロムニーの実社会での実績を買っている人たちが多く、ロムニー候補の宗教に関する非難等は今のところ、ほとんど聞くことがありません。また「Politically Correct 政治的に正しい／中立」が「金」である現代においてモルモン教を攻撃することは、incorrect attitude 相応しくない行為と見なされかねないので誰も何も言わないと言っていいでしょう。

ロムニー候補の妻のアン・ロムニーさんについても、4月にある女性コメンテーターが非難を口にし、彼女が一度も社会に出て働いたことがない、つまりWORKING MOMではなく、働く女性の苦勞を知らないし、社会や経済のことを毛頭知らない、と言ったことに対して※4、敢えて社会に出て働くことを選ばず、5人の男の子たちを育て、夫を支えることを選んだ彼女を擁護する意見が続出し、離婚を減らし、子育て期間中は家に留まる選択をし、家族のきずなを優先する保守的信仰を共有する女性達からの支持が集まる結果になりました。

オバマ大統領の宗教

一方、オバマ大統領の宗教は何なのでしょう。就任からまる三年経っており、自らクリスチャンである、と表明しているにも関わらず、彼がクリスチャンであるのか分からない、と答える人がまだまだ大勢います。2010年当時なんと最高18%もの人々が彼はイスラム教だ、と答えました。現に彼は幼年期にインドネシアでイスラム教徒に囲まれて育っ

たこともあり、アラビア語のコーランの言葉がすらすらと口から流れ出たことで大きな反響が起きました。ケニア人であった彼の父親、そして母と再婚したインドネシア人の継父は二人ともイスラム(ケニア人の父は後に無神論になった)でしたから影響がなかったとも言えないでしょう。

彼自身は1990年代初期にシカゴのトリニティー・ユナイテッド・チャーチ・オブ・クライスト教会にて、ジェレミア・ライト牧師より洗礼を受けたことになっており※5、現に20年以上その教会に出席していました。そこで結婚し、子供たちも祝福式を受けています。ところが、問題はそのトリニティー教会がBLACK LIBERATION THEOLOGY 黒人解放の神学に立っている教会であり、キリスト教の中心的なメッセージである個人の救済から始まる信者の共同体形成と社会変革ではなく、階級闘争的な「社会正義の実現」が全面に据えられ、個人の救済が曖昧になってしまっている教えに立っていたこと※6。「解放の神学」というのはもともと1950年代、南米で発達した運動の一つなのですが、イエスの働きを中心は様々な支配や権威によって抑圧された人々を解放し、社会正義を実現するためだった、というものです。解放の神学や、リベラル神学、キリスト教社会派と呼ばれるような流れの根底には19世紀以降の聖書離れがあります。「聖書のみ」と訴えた宗教改革の時代から、啓蒙、産業革命の時代を経る中で、天地創造やその他の奇跡、処女懐胎、キリストの復活など、もはや字義通りには信じない人たちが増えて行きました。キリスト教文化にあまりにも深く根付いている欧米社会において、キリスト教信仰そのものを払拭することは不可能だった代わりに人々は「では聖書の中の何を残すのか」と問うようになっていったのです。そこで、聖書の再解釈が始まり、魂の救済ではなく、道徳、善行、社会正義に教えが移って行ったのです。このような立場を一般に自由主義、リベラル、あるいはプログレッシブな立場と言いますが、これに対して

「やはり聖書は丸ごと神の言葉として信ずべきもの」という立場に立つ人々を保守派のキリスト者 (Conservative Christian) と言います。

オバマ自身、自分は「プログレッシブ・クリスチャン／進歩的クリスチャン」であると表明し、歴史的、伝統的なキリスト教と自分との間に一線を画して自分の立場をはっきりさせました。しかし実際に彼が自らの信仰にどの程度の重きを置いているかを端的に示している彼の選択がありました。大統領選を戦おうとする中、ライト牧師のアメリカを酷評する発言、特に 9/11 が自業自得であると発言したサウンド・クリップ (録音) が繰り返しネットやラジオで流れるようになると、オバマはトリニティー教会、特にライト牧師との距離を置くために教会をやめ、牧師と断絶という道を選びました。しかしその結果、「政治のためなら自分の牧師すら否定する」という批判も招く結果になりました。以降、大統領はどこの教会にも定期的に出席していないようです。

いずれにしても、この三年間に示してきた人口妊娠中絶の容認、信教の自由への侵害と見られる政策、そして先月の同性愛者の結婚の容認等、どこを見ても「非聖書的な価値観」に立っているように見える大統領を本当にクリスチャンと言えるのか、と問うならば、保守的なクリスチャンたちは「否」「分からない」と答え、大統領がスピーチや演説の中で「神」や「ジーザス」などの言葉を使えば使うほど、ますます不信感が募る、ということが起きています。リベラルな人々は、彼自身がそう表明しているのだから「クリスチャンではないか」といいますが、彼の宗教が最終的に何であるのかは「オバマ自身のみ

ぞ知る」ということなのかも知れません。

大統領選に向けて

選挙戦がどのように展開していくのかを予測することは難しいことなのでしょう。そして今回、ロムニーとオバマが候補であるなら、この選挙こそ、史上初の NON-WASP (White Anglo Saxon Protestant) 同士の対戦になるわけです。※7 かつてはモルモン教を受け入れることができなかった保守派のキリスト教徒も、オバマの非キリスト教的な価値観を前に、ロムニーの宗教には目をつぶって、政治的、文化的な理由でロムニー氏に投票するのではないかと予測します。

オバマが確固たるキリスト教信仰に立っていないことは上記で説明したように明らかですが、では彼のコア・ビリーブ、核心となる信条は何なのか。前回の選挙で主流派メディアはことごとく彼の背景、思想、信条の VETTING 精査を避けて通ったこともあり、この3年間の実績と共に、今になっていろいろなことが言われるようになって来ています。その結果、選挙がどのような影響を受けることになるのでしょうか。

アメリカは今なお、全世界の政治と経済に多大な影響を及ぼす国であり、グリニッチ教会という日本人教会がアメリカにあり、NYに大勢日本人が駐在や永住で住んでいるのも、この国がそれだけ力のある国だからです。今なお世界中から人が集まってくるのもアメリカです。この国のかじ取りをする大統領の責任は絶大なものであり、願わくは神を恐れ、正義と慈愛に立った人が選ばれるようにと祈らざるを得ません。■

参照

- ※1 <http://www.nytimes.com/roomfordebate/2011/10/30/the-role-of-religion-in-the-2012-election>
- ※2 <http://www.wmctv.com/story/18507587/pastors-civil-rights-leaders-ask-president-to-take-back-opinion-on-gay-marriage>
- ※3 <http://carm.org/is-mormonism-christian>
- ※4 http://www.huffingtonpost.com/hilary-rosen/ann-romney-and-working-mo_b_1419480.html
- ※5 <http://www.thedailybeast.com/newsweek/2008/07/11/finding-his-faith.html>
- ※6 http://en.wikipedia.org/wiki/Black_liberation_theology
- ※7 <http://blogs.reuters.com/gregg-easterbrook/2011/07/14/twilight-of-the-wasps>